

阮元の粵東刊改問題について

若松 信爾

九州女子大学 共通教育機構
北九州市八幡西区自由ヶ丘一―(〒八〇七―八五八六)

(二〇一三年十一月一日受付、二〇一三年十二月十九日受理)

はじめに

阮元(一七六四―一八四九)が王引之(一七六六―一八三四)にあたえた書簡中において、王引之の父である王念孫(一七四四―一八三三)晩年の「古韻二十一部」(最晩年は古韻二十二部)^①に、『広韻』にある漢字を当てはめて配置して出版することを記した文言がある。この書簡は羅振玉(一八六六―一九四〇)が編集した『昭代経師手簡』に収録されている。王国維(一八七七―一九二七)はこの文言を以て阮元は古韻の学に明らかではないと判断し、また王国維のこの見解が後世にまで阮元に対する評価となつている部分がある。後世この件を粵東刊改と称しているが、確かに中古音の韻書である『広韻』と、上古音の韻書である「古韻二十一部」を混交してしまうことは、特に清代の顧炎武(一六一七―一七五九)・戴震(一七二三―一七七七)・段玉裁(一七三五―一八一五)等の多くの考拠学者の主眼とした経書研究における正確な古韻の復元という立場からすると、全く無意味なこと

であり、如何なる意義があるのか、という不見識の謗りは免れないであろう。しかし、実際に阮元は古韻の学に未熟であるために、このような意見を王引之に提示したのであろうか。阮元の文集『肇経室集』にある古韻学に言及した箇所をみていくと、阮元自身も王念孫に師事しており、必ずしも阮元の古韻学に対する知識が不正確であつたとはいえない部分もある。このようなことが今までの阮元の古韻学の知識を理解する上で、非常に不明瞭な点となつている。そこで本稿は王国維の発言から始まる、阮元の古韻学の知識に対する批判・疑問を踏まえた上で、阮元が何故敢えて粵東刊改という問題を起したのか。またそこになんらかの深い別の意図があつたのではないか、という点からこの問題に論及していくことにする。

一、阮元に対する批判の原因

阮元に対する批判の原因となったものは、「与王伯申書」という、王引之にあたえた書簡にある。書簡の数は九通あり、これらの書簡は羅振玉の『昭代経師手簡』に収録されている。しかし、『昭代経師手簡』は書簡そのものを影印するのみで、甚だ読みづらいくまた書簡の製作年代も確定されていない。^②二〇〇五年に陳鴻森氏が「阮元與王引之書九通考釋」において全ての書簡の内容を考証し、その年代を確定している。^③そこで書簡については陳鴻森氏の論文に従い、その内容をみていくことにする。問題となる「古韻二十一部」に関する書簡は、「与王伯申書二」・「与王伯申書七」である。先ず「与王伯申書二」の關係箇所を鈔出してみることとする。()内は注である。

古韻二十一部刻字の事は、若し元粵に在らば、十日にして即ち成るも、今に至るまで杳然たり。吳蘭修事を辨じて名有るも疲緩し、亦之を催さず。堂中の経解も、若し夏道と厚民の緊緊として催辨するに非られば、必ず中輟せしならん。(夏升起て去らば、即ち人の力を出す可き無し。巧巧として刻完うして即ち升る) 寄りて思ふに年兄大人此の時郷に居りて事無し、何ぞ廣韻を將ひて取り出し、一教館の人に送りて其れ排寫せしめざるや。(字は廣韻の大字の大に似たるを要す)

特に須らく至・祭等一一指示すべきのみ。單に大字を寫し、小字を寫さざれば、數萬字に過ぎずして寫成り、舎下に交ふれば之を刻すること甚だ易し。舎下の管事は張茂才(鶴書・號は琴堂)舎親、之に付さば即ち刻す可きなり。^④

この書簡は王国維が嘉慶十年の製作としたことから、劉盼遂の『高郵王氏親子年譜』においても嘉慶十年の事としている。^⑤しかし、この書簡製作年代については、王章濤は王献唐の説に基づき道光十年とし、^⑥また、濱口富士夫・陳鴻森等が書簡の内容を詳細に検討した結果、道光十二年以降の製作であるとしている。^⑦文中の「居郷無事」を王引之の父の丁憂と解すれば、道光十二年以降がやはり妥当であろう。書簡は阮元自身が吳蘭修に「古韻二十一部」の出版を依頼したがうまくいかなかったため、王引之にその事業を慫慂し、その出版については文選樓で行ってもよいという内容である。この出版事業は「十日にして即ち成る」、「之を刻すること甚だ易し」という文言から理解できるように小冊子程度のものであろう。問題になるのはここで「古韻二十一部」に『広韻』を合併させた形で、それを行うという阮元の意見である。それについては後述するとして、事の経過を述べるため、次に「与王伯申書七」の關係箇所をみることにする。

冬半ば京中の來書に接し、墓銘の已に收到せらるるを知り、

冬間已に家郷に到らんことを想ふ。頃る粵中の曾釗の書に接し、廿一部古韻已に上板せるを知る。冬初前に等語有り。然らば則ち前書の場に在りて別に刻さんと欲するは、必ずしもせざるなり。曾公の書内にまた云ふ、風・芄等の字の如きも亦須らく提出すべきも、究に其の提する所を知らざる者、若干の字あるなり。と。(8)

陳鴻森氏はこの書簡を冒頭の文言から道光十三年の冬としてゐる。阮元の著した王念孫の墓誌銘を王引之が受け取ったことと、広東の曾釗から阮元に送られてきた手紙の内容が記されている。書中の「廿一部古韻已に上板せるを知る」については、陳鴻森氏は粵で曾釗が「古韻廿一部」を成書に近い状態にまで仕上げたと解している。(9) 続く「前書の場に在りて別に刻さんと欲するは、必ずしもせざるなり」という文脈と、周知の如く阮元によるこの書の出版は無かつたことから考えると、版木に刻む寸前の状態に近かつたのかもしれない。またこの出版事業の依頼を前述の呉蘭修から曾釗に変更しているのが分かる。この二通の書簡が阮元が王引之に与えた「古韻二十一部」関する書簡である。

王国維のこれに対する有名な批判を以下に挙げる。

先生（王念孫のこと）の諸韻譜中、最も切要なるは説文諧聲譜爲り。先生恒に擧げて以て人に示す。李許齋方伯に致す書

中に、録する所の至・祭の二部及び侯部入聲表は、即ち此の譜中より摘出せる者なり。後に定稿を以て阮文達公に広東に寄す。故に遺書中僅かに初稿有りて、二十一部完具すると雖も、然れども録する所は許書の二十分の一に過ぎざるのみ。此の書文達粵東に在りし時刊行を爲さんと擬すも、未だ幾ばくならずして粵より去る。而して稿本は尚ほ學海堂に留まる。文達嘉慶乙丑に於いて雲南由り文簡に札を致して云ふ（中略）此の書の粵中の刻の成と否とは、知る可からずと雖も、即ち刻成せしむれば、乃ち此の學を知らざるの人を任じ、將に表中の諸字意に任せて出入せんとす。不刻の愈るに如かず。文達此の事に於いて全く憤憤に屬するを知る可し。文簡此の書を得て如何なる答へを作すかを知らざるなり。又第一札は文簡に廣韻を將ひて取り出し、一教館の人をして排寫せしめんことを勸む。此の事亦何ぞ容易なるや。然れども此れに因りて先生の此の譜の家中に別に副本無きを知る。先生父子歿後、遺稿は第三孫の忠介（壽同）の所に在り。道光季年郵縣の王樓軒（梓材）忠介の家に館し、補二十一表を爲し、詩經韻譜の首に冠す。樓軒は史學を治め、徐星伯・張石船の諸公と遊ぶ。又宋元學案を補ひ、時に名有り。然れども此の學の於いては實に未だ先生の堂に升る能はず。其の至・祭二部及び侯部入聲に於いては、均しく先生の原譜を用ひず。又原譜の體例を用ひず。蓋し未だ先生の此

の譜は説文の爲に作るを知らず。其の書教館の人をして廣韻に照らして排寫せしむる者と視て、未だ之れ能く愈らざるなり。嗚呼、文達の通博を以てするも、先生の學に於いては尚隔膜あること此の如し、則ち他又何ぞ責めん。⁽¹⁰⁾

(中略) とした部分には先の阮元の二通の書簡が引用されるのであるが、徒に冗長になることを避けるため略した。王国維の阮元書簡の製作を、嘉慶十年に比定する説は誤りであることは定説になっている。しかし、王国維の阮元にたいする「文達此の事に於いて全く憤憤に属す」、「文達の通博を以てするも、先生の學に於いては尚隔膜あり」という評価は肯定的になつてゐる感があり、蕭璋・孫玄常等もこの説に賛意を表している。⁽¹¹⁾濱口氏の論文ではこの点について客観的に記述している。

すなわち王念孫の二十一部は『説文解字』それ自体のものであるにもかかわらず、阮元が意図したのは、『広韻』所収の漢字を古音分部表に配置しなおすことであつた。これは近音の音理体系とは明確に一線を画したうえで古音の分部を解明したとして、その意義を強調した王念孫の意図を完全に無視した組替えであり、実に「古韻廿一部」の破壊でしかないと見做すのである。しかし阮元の音韻の認識に関する評価は、たとえば陳澧は郝懿行の『爾雅義疏』の古音を応用した

訓詁手続きを高く評価するとともに、それが阮元に由来するとして阮元も高く評価する。ところが孫玄常「王念孫《爾雅郭注》(疏)刊誤」札記」では「阮元は音韻に疎く、したがつてその門から出た郝懿行の疏証は王念孫によつて訂正される点が多かつたのも当然である」とあり、王国維の見解と一致する。⁽¹²⁾

つまり阮元の音韻に対する評価は陳澧の如き見解もあり、一概に無知であつたとはいえない部分がある。濱口論文では続いて阮元の「武進張氏諧声譜序」にある以下の如き阮元の音韻に対する文言に對し別人のごとくであるという。⁽¹³⁾

其の言に曰く、今の二百六部を讀む者は(少なし。之を古に求むれば、既に合はず。以て今に示せば則ち未だ曉らずして、徒に)之を牽引し、之を分割するは、甚だ謂はれ無きなり。今故に擧るも之を空しくす。詩を以て韻を求め、佐くるに易・屈を以てす。韻を以て部を分ち、部を以て聲を類し、聲を以て説文の字に諧ふのみ。張氏の此の説奇にして法あり、説文の聲を審らかにすること亦細やかなり。以て未だ韻書の時の本來部居有らざるを見るに足る。⁽¹⁴⁾

しかも、阮元が序文で引用した『説文諧声譜』の文章の前文をみ

ると「諸家の廣韻を以て標目し、其の合はざるは、割裂して之を分つ、是れ其の虚目を取るなり」⁽¹⁵⁾とあり、此の書の『廣韻』に対する考えがより鮮明にみてとれる。阮元は張成孫のこの姿勢に賛意を示し、一方では「古韻二十一部」を『広韻』に合わせて出版しようとする。この矛盾を濱口氏はこの序文を書いた道光十七年の時点において「これは阮元が王年孫の『与李方伯書』を研究したことによつて、今音を排除して『詩経』の押韻に徹底した考古の立場を理解したからなのであるうか」⁽¹⁶⁾と推測しているが、実際に阮元はここに至るまで「古韻二十一部」を理解できなかったであろうか。しかも阮元は道光十二年頃作の「王石臚先生墓誌銘」に次のように記している。

乾隆丙午京に入りて先生に謁す。先生の學は精微廣博にして元⁽¹⁷⁾に語る。元能く其の意を知り、先生遂に樂みて以て教へを爲す。元の稍く聲音・文字・訓詁を知るは、先生より得るなり。(中略)古音は顧氏・江氏・戴氏より皆考正有り、金壇の段氏十七部に分ちて益々精と爲る。段氏支・之・脂を分ちて三部と爲すや、前人の未だ發せざる所を發す。先生も昔亦同見此れに及ぶも、段氏の書先に出づ、遂に作を輟む。然れども先生の分つ所は、乃ち二十一部、東一・蒸二・侵三・談四・陽五・耕六・眞七・諄八・元九・歌十・支十一・至十二・脂十三・祭十四・盍十五・緝十六・之十七・魚十八・侯

十九・幽二十・宵二十一。之を群經・楚辭に案じて、斬然として紊れず。其の至・祭・盍・緝を分ちて四部と爲すや、則ち更に顧・段諸家の未だ及ばざる所にして、陸法言の未だ析たざる所の者なり。⁽¹⁷⁾

この墓誌銘をみると、阮元は親しく王念孫より古韻の教えを受けたことが理解でき、また恰も「古韻二十一部」も理解しているが如くである。となれば阮元の「古韻二十一部」と『広韻』に合わせて出版するという企画には、単に阮元が古韻に対して無知であつた。というより別の意図があつたのではないかと考えられな

二、阮元の文章論

前述の問題について考察していく前に、少々視点を變えて阮元の文章に対する考えを概観してみる。そうすることで前章における疑問に何らかの形で接近できるかもしれないからである。いうまでもないことであるが、阮元は文選学の大家であり、駢文の名手である。特に文選に対する傾倒ぶりは世に知られている。「南宋熙熙貴池尤氏本文選序」には幼い時から文選を学習した様子が記されている。

元幼くして文選の學を爲すも、壯にして未だ其の理に精熟する能はず。然れども訛文脱字時時校して之に及ぶ。昔元の張伯顔・明の晉府の諸本を得て、即ち秘冊と爲す。嘉慶丁卯、始めて昭文吳氏より南宋尤延の本を得、無上の古冊と爲す。(中略) 元の家揚州の舊城文選巷に居す。即ち隋の曹憲故里、李崇賢の文選の學を傳へて選注を爲すに由る所の者なり。元既に文選樓を家廟の旁に構へ、繼いで此の冊を得て、之を樓中に藏す。⁽¹⁸⁾

他に「揚州隋文選樓記」には以下の如く記す。

元謂へらく古人の古文・小學は詞賦と源を同じくし流れを共にす。漢の相如・子雲の如きは深く古文・雅訓に通ぜざるは無し、隋の時曹憲江淮の間に在り、其の道大いに明らかにして、馬・揚の學、文選に傳へらる。故に曹憲既に雅訓に精しく、又選學に精し。一群に傳へ、公孫羅等、皆選注有り。李善に至りて其の成を集む。然らば則ち曹・魏・公孫の注、半ば李善の注の中に存す。(中略) 唐人の文を屬するに、尚選學に精し、五代の後乃ち之を廢棄す。昭明の選例は、沈思翰藻を以て主と爲し、經・史・子の三者は皆選ばざる所なり。唐・宋の古文は、經・史・子の三者を以て本と爲す。然らば則ち韓昌黎の諸人の取る所、乃ち昭明の選

らばざる所、其の例已に明らかに文選の序に著すものなり。桂苑珠叢久しく亡佚し、間々他書に引かる。其の書諒に部居有りて、小學訓詁の淵海爲り。故に隋・唐間の人の書に注するに、引据便にして博なり。元幼時文選の學を爲す。既にして經籍纂詁二百十二卷を爲すは、猶ほ此の志なり。此れ元の襄日考へる所なり。⁽¹⁹⁾

近藤光男氏は阮元が『桂苑珠叢』に代わるものとして、幼時より治めた文選學を生かし、『經籍纂詁』を作つたと述べている。そのことから「阮元の文選學には揚州隋文選樓以前に杭州における『經籍纂詁』のあることを忘れてはならないこととなる」⁽²⁰⁾と、阮元の『經籍纂詁』編纂の動機には文選學の影響する所頗る大であつたことを指摘する。またこの文中にある「古文・小學と詞賦と源を同じくし、流れを共にす」という文言から李貴生氏は阮元は小學と詞賦が同源であり、この二つが密接な関係であると認識していたと指摘し、また、李貴生氏はこの認識は他に「西湖詒經精舍記」にも窺えるという。⁽²¹⁾この文には『經籍纂詁』編纂の主旨も含まれるので、その部分から引用してみる。

聖賢の道は經に存す。經は詒に非られば明らかならず。漢人の詒は、聖賢を去ること尤も近きと爲す。之を譬へれば越人の語言は、呉人能く之を辨ずるも、楚人ならば則ち否らず。

高曾の容體は、祖父之を見るに及ぶも、雲仍ならば則ち否らず。蓋し遠き者の見聞は、終に近き者の實に若かざるなり。元少くして學を爲し、宋人より始む。宋よりして唐に求め、晉・魏に求め、漢に求め、乃ち愈々其の實を得。嘗て古人の誥散じて稽へ難きを病むなり。浙江に督學たりし時に、諸生を西湖孤山の麓に聚め、經籍纂詁百有八卷を成す。(中略)漢の相如・子雲、百代に文雄たる者も、亦凡將・方言に由りて、經の詁に貫通す。然らば則ち經を舍ける文は、其の文質無し。詁を含きて經に求むは、其の實ならず。文を爲る者、尚以て經の詁に昧かる可からず。況や聖賢の道をや。⁽²²⁾

この文においては阮元の修學過程と訓詁学に対する信頼が窺える。また文の終わりでは司馬相如や揚雄等の文豪も訓詁学に精通していた点を記す。李貴生氏はこの部分を以て阮元が『文選』を文献材料として軽視できないものであると捉えていると述べている。⁽²³⁾つまりは『文選』も訓詁学において貴重な文献という位置づけであり、しかも訓詁学は文章を作る点でも重要なものであるという認識である。これらのことから考えると『經籍纂詁』には經解のみならず、作文の見地からの利用も意図されていたのではないだろうか。阮元の弟子である王引之の「經籍纂詁序」に記す所は以下の如くである。

曩に戴東原庶常・朱笥河學士、皆傳注を纂集して以て學者に示さんと欲するも、未だ編を成すに及ばず。吾師雲臺先生、孫淵如編修・朱少河孝廉と共に之を成すも、亦未だ果たさず。先生浙江に督學たるに及び、乃ち體例を手定し、韻を逐ひて増收し、總て名流を彙め、分書類輯し、凡そ二年の久しきを歴て、一百十六卷を編成す。一韻を展べて衆字畢く備はり、一字を検して諸訓皆存し、一訓を尋ねて原書識る可し。所謂六藝の鈐鍵を握り、九流の潭奥を廓く者なり。(中略)後の是の書を覽る者、鑿空妄談の病を去りて、古を考へ、古人の傳注を取りて、其の聲音の理を得。以て其の然る所以を知るも、傳注の未だ安からざる者は、又能く博く前訓を考へ、以て之を正さば、古の聖賢の著書の本旨を傳ふ可く、且つ吾師の是の書を纂するの意を失せざるに庶らんか。⁽²⁴⁾

これを見ると經解の点ばかり強調され作文の点からの言及はない。ともあれ『經籍纂詁』は古訓を調べるに便であり、字書としても機能し、利用できるものである。当然であるが梁啓超が「古訓を調べるには便利な類書であり、韻によつて編次しているが、目的は韻学の研究ではない」⁽²⁵⁾というように古韻学そのものを研究発展させるといったような性質の書物ではないことはいままでもない。

次に阮元の文章論が一体如何なるものであつたのかをみていく。ここで贅言するまでもないが、阮元は道光期の駢体文の大家

である。その駢体文に対する文章論は有名な「文言論」・「文韻論」に顯著に表明されている。先ず「文言論」に述べる所を見ていく。

古人簡策を以て事を傳ふる者少なく、口舌を以て事を傳ふる者多し。目を以て事を治むる者少なく、口耳を以て事を治むる者多し。故に同一言を爲すも、轉じて相語を告げて、必ず愆誤有り。是れ必ず其の詞を寡くし、其の音を協せ、以て其の言を文り、人をして記誦し易く、能く増改すること無く、且つ方言・俗語を其の間に雜ふること無からしむれば、始めて能く意を達し、始めて能く遠くに行はる。此れ孔子易に於いて文言の編を著す所以なり。古人の歌詩・箴銘・諺語、凡そ有韻の文は、皆此の道なり。爾雅釋訓は訓蒙を主とし、子子孫孫以下、韻を用ひる者三十二條なるも、亦此の道なり。孔子乾坤の言に於いて、自ら名けて文と曰ふ、此れ千古文章の祖なり。文章を爲す者、音を協せ以て韻を成し、詞を修め以て遠きに達し、人をして誦し易く記し易からしむることに務めずして、惟單行の語を以て從横恣肆し、動もすれば輒ち千言萬字、此れ乃ち古人の所謂直言の言・論難の語を知らず、言の文有る者に非るなり、孔子の所謂文に非るなり。文言の數百字は、幾ど句句に於いて韻を用ふ。(中略) 然らば則ち千古の文は、孔子の易を言ふより大なるは無し。

孔子用韻比偶の法を以て、其の言を錯綜して、自ら名けて文と曰ふ。何ぞ後人の必ず孔子の道に反して、自ら命じて文と曰ひ、且つ之を尊びて古と曰はんと欲するや。⁽²⁶⁾

阮元は『易經』の孔子作といわれる「文言伝」を以て文章の祖であると述べ、その修辭法である韻と偶を用いたものこそ文章であるという。つまり、ただ単に千言萬字書き綴つたとしても、それは文章とはいえないのである。韻と偶を用いる文は当然の帰結として駢体文となる。続いて「文韻論」における阮元の駢文論をみることにする。文は息子の阮福との問答の形をとっている。

福問ふて曰く、文心雕龍に今の常言に、文有り筆有り、以て無韻の者は筆なり、有韻の者は文なりと爲すと云ふ。此れに據れば、則ち梁の時の恒言に有韻の者は、乃ち之を文と謂ふ可きも、昭明の文選に選ぶ所の文は韻脚を押まざる者甚だ多し、何ぞや。曰く、梁の時の恒言の所謂韻とは、固より韻脚を押むを指すも、亦兼ねて章句中の音韻を謂ふ。即ち古人の言ふ所の宮羽、近人の平仄なり。福曰く、唐人の四六の平仄は、梁以前に論ずる所に非ざるに似たり。曰く、此れ然らず。八代韻を押まざるの文は、其の中に奇偶相生じ、頓挫抑揚、詠嘆聲情、皆音韻宮羽に合する者有り。詩・騷而後、皆然らざるは莫し。(中略) 是を以て聲韻流變して四六と成る

も、亦祇章句中の平仄を論ずれば、復た脚韻を押むこと有らざるなり。四六は乃ち有韻文の極致にして、之れを謂ひて無韻の文と爲すを得ざるなり。昭明の選ぶ所の韻脚を押まざるの文は、本より皆奇偶相生じ、聲音有る者は、所謂韻なり。休文の矜りて翹めて獲ると爲す所の者は、漢・魏の音韻は、乃ち無心に暗合すと謂ふも、休文の音韻は、乃ち多く意匠に出づるなり。豈に漢・魏以來の音韻は、其の本原を溯れば、亦久しく經より出づるを知らんや。孔子自ら其の易を言ふものを名けて文と曰ふ。此れ千古の文章の祖なり。文言は固より韻有り、而して亦平仄聲音有り。(中略)綜べて之を論ずれば、凡そ文章は聲に在りては宮商を爲し、色に在りては翰藻を爲す。即ち孔子文言の雲龍風虎の一節の如きは、乃ち千古宮商翰藻奇偶の祖、一朝一夕の故に非ずの一節は、乃ち千古嗟歎成文の祖、子夏の詩序の情文聲音の一節は、乃ち千古聲韻性情排偶の祖なり。吾故に曰く、韻とは即ち聲音なり、聲音は即ち文なり。然らば則ち今の人の便とする所の單行の文、其の奥折奔放を極める者は、乃ち古の筆にして、古の文に非ざるなり。沈約の説、或ひは横に指さして八代の衰體と爲す可きも、孔子・子夏の文體、豈に亦衰へんや。是の故に唐人の四六の音韻は、愚者と雖も能く之を效ふも、上は齊・梁に溯りては、中材已に限る所あり、漢・魏以上より、孔・トに至るが若きは、此れ上哲に非ざれば擬する能はざるなり。⁽²⁷⁾

「文韻論」の発言は前の「文言論」をさらに敷衍する内容となっている。これは阮福が『文心雕龍』にある「無韻は筆なり、有韻は文なり」を引き、『文選』に韻を押まない文が多いのはなぜか。という質問に対して答えたものである。近藤光男氏によると阮元は無韻とは韻律に協われないもの、有韻は韻律に協うものとしている⁽²⁸⁾という。そして『文選』は韻律に協った文を採録していると判断する。所謂文の淵源は「文言伝」にあるといい、文章とは駢体文を以て正統であるとす。しかも唐時代の駢体の模倣は容易であるが、漢・魏以上の時代の模倣は至難であると述べる。ここで興味深いのは阮元の駢体文の製作者としての視点から述べる、漢・魏以上の文体の模倣についての発言である。これが粵東刊改事件の動機になったと考えられないであろうか。つまり粵東刊改の原因は阮元の文章観にあったということにならないであろうか。

三、何故阮元は粵東刊改を行おうとしたのか

再びここで粵東刊改の問題に立ち戻る。阮元がこの作業を行うにあたり、最初に依頼したのは呉蘭修であったことは前述した。そしてこの問題に関して必ず言及されるのが、『要經室統集』三卷の収載される「与学海堂吳学博蘭修書」である。この書簡には

阮元の意図が明瞭であるため敢えて全文を鈔出してみる。(一)内は注の文である。

陸灋言等の四聲韻を定め、二百六韻と爲して後より、唐人詩賦を作り、窄を并せて寛と爲し、沿ひて今に至まで祇一百六韻のみ。今韻を以て今の詩文を爲るは則ち可なり。若し古詩賦を作りて今韻を用ひるは、今ならず古ならず、識者之を哂はん。唐・宋に至りて以來、獨用通用、浅人の爲す所、已に依據鮮し。或ひは且つ臆ふに時俗の土音を以し、動もすれば輒ち亂用するは、直に元人の劇曲の韻を以てするに似たり。唐人に擬して律賦を爲らんとすれば、更に今の一百六韻に如かざるなり。豈に音韻・篆文・訓詁に明らかならずして、能く上は相如・子雲に擬する者有らんや。(即ち昌黎の進學解の韻の如きは、無法を臆用す。世に其の謬を知る者罕なり)然らば則ち將に奈何にせんとなす。因りて古韻の分合を思へば、近ごろは惟金壇の段氏若庸の六書音均表十七部のみ善と爲す。之・脂・支・哈の四韻の如きは、唐人皆并せて四支合用と爲す。孰か羣經・楚辭皆三部を分斷し、絶へて相混はらせず、文選も亦分ちて通用せざるを知らんや。高郵の王懷祖先生、六書の音韻を精研し、古音の一書を著さんと欲すも、段氏の成書に困りて、遂に筆を輟む。(余三十年前即ち此の論を聞く)然れども其の廿一部に分つは、甄めて詩・

騷を極め、豪芒を剖析す。但に段氏より密なるのみならず、更に陸氏より密なる者有り。予屢廣韻に併せるに古韻分部を以てし、漢以上の文章辭賦を擬する者に於いて取りて之を用ふるに便ならしめんと欲するも、未だ之が計を爲すに暇あらざるに迄る。學海堂中年兄、深く古音を掣す。曷ぞ段氏に就きて之を精審して進みて王氏の學を以てせざるや。定めて古韻廿一部を爲さば、羣經・楚辭を以て之を根柢と爲し、之を圍範と爲さば、隔部臆用の謬無きに庶らんか。或ひと曰く、漢・晉の文章の韻、已に此の圍範より出づる者有らば、奈何ぞ此れを以て之を限らん。答へて曰く、漢・晉の文章、齊・梁の韻は、寛なりと雖も、之・支・脂等の韻は、未だ曾て通雜せず。若し漢・晉の文辭を學びて、更に能く此の漢・晉以上の韻を謹守し、法を上に取り、亂韻を撥め、之を正しきに反へさば、更に善からずや。況や今韻一百六韻を以て、并せて廿一部と爲すをや。已に寛の至りなり。學者も亦何ぞ憚りて此の韻を用いざらんや。年兄再び堂中の林・曾・楊の諸子と商榷寫定することを試みよ。(即ち廿一部の至・質の如きは、須らく各字を將ひ提摘して出して、彼の韻の字を刪去すべし)即ち堂中の栞板に在りて帙を成すべし。數萬の大字に過ぎざれば、即ち學古の士に嘉惠すべし。予老いると雖も亦之を觀ることを得るを樂み、且つ家郷の子弟に分受せん。庚寅閏月。⁽²⁹⁾

この書簡は庚寅とあることから、道光十年に記されたことがわかる。「与王伯申書二」より二年前である。また陳鴻森氏の「阮元寧經室遺文輯存」には王猷唐著『顧黃書寮雜錄』所収の「段氏十七古音序」を収録している。⁽³⁰⁾「段氏十七古音序」の主旨は「与学海堂吳学蘭修書」とほぼ同様であり、またこの書簡が道光九年の作であることから、阮元が王念孫の「古音二十一部」を入手する以前は段玉裁の「十七部」を以てこの企てがあったことが理解できる。⁽³¹⁾「与学海堂吳学蘭修書」の内容をみると「今韻を以て今の詩文を爲るは則ち可なり。若し古詩賦を作りて今韻を用いるは、今ならず古ならず、識者之を哂はん」とあるように、阮元も上古音と中古音の相違を認識していたことがわかる。では阮元は何故敢えて後世粵東刊改といわれるような問題をおこしたのであるのか。それはこの書簡にあるように段玉裁の「六書音均表」、王念孫の「古音廿一部」により明らかにした古韻の音韻体系を応用し、「予屢廣韻に併せるに古韻分部を以てし、漢以上の文章辭賦を擬する者に於いて取りて之を用ふるに便ならしめんと欲す」と記す如く、漢代以前の文章を模倣製作するためにほかならなかつた。このような書物を作成することにより文章製作者は古韻を正確に理解し、且つ韻律や押韻においても、より完全に漢以前の音韻体系に基づく文章を製作することが可能になると判断したのである。つまり阮元は「文韻論」における「漢・魏以上より、孔・トに至るが若きは、此れ上哲に非れば擬する能はざるな

り」という考えからこれを「擬する」ことが実践可能であるとする方法を模索していたのではないだろうか。

この「与学海堂吳学蘭修書」に述べられた阮元の意図に関して陳鴻森氏は「与王伯申書二」において阮元が「十日にして即ち成る」と記したことから、あまり重視しておらず、単に漢代以上の文章を模倣するためだけの俗学のような書と捉えている。⁽³²⁾逆に李貴生氏は阮元の議論は現在から見ると迂遠であることは免れないが、このような思想は当時の考証学者の考古求实精神の一種の体現であるといい、また考証学を文学の範疇にまで貫徹しようとした、と述べる。⁽³³⁾阮元にとつて「古韻二十一部」の基づく韻書の出版は、李貴生氏の指摘するが如く清代考拠による古韻学を基盤とした文学的営為にほかならなかつたであろう。阮元の『寧經室集』の自序には以下の如く記している。

余三十年以来、説經・記事、之を書に筆せざる能はず。然れども其の文選の序の如く所謂事は沈思に出で、義は翰藻に歸する者を求むるも甚だ鮮し。是れ之を文を爲すと稱するを得ざるなり。今余年六十に届く。自ら舊帙を取り、兒子輩に授け重ねて編し之を寫さしむ。分ちて四集と爲し、其の一は則ち説經の作、賈・邢の義疏に擬するも、已に僭と云へり、十四卷。其の二は則ち史の作に近し、八卷。其の三は則ち子の作に近し、五卷。凡そ四庫の書の史・子の兩途に出づる者

は、皆之に屬し、之を無文と言ひ、惟其の事を紀して、其の意を達するのみ。其の四は則ち御試の賦及び駢體有韻の作、或ひは古人の所謂文に近き者有るか。然れども其の格も亦已に卑し、凡そ二卷。⁽³⁴⁾

これをみると「古人の所謂文に近きもの有るか」という文言は謙遜ともとれるが、阮元が何如に文章に意を用い、より完璧な有韻駢体の文章を目指していたかが理解できる。

吳蘭修がこの依頼を果たせなかつたため、曾釗がこの事業を請け負うことになつたことは前述した。此の時曾釗の友人であつた方東樹は曾釗に次のように忠告している。

儀徴の阮相國深く其の説を聽とし、因りて吾友南海の曾君勉士に屬して、其の類例に依りて二十一部古韻を作らしむ。余聞きて之を疑ひ、吾友に諗げて曰く、凡そ古音を求むる所以の者は、將に以て古經の音を證せんとして、以て今の用に施さんと欲するに非ず。苟くも經の音既に得れば則ち止む。必ずしも古を尊びて今を卑しむるに非ざるも、矜きを以て苟くも難しと爲すなり。⁽³⁵⁾

方東樹が何故曾釗にこのような忠告をしたのかという点について、濱口氏によると「古音分部との体系の差異に無自覚に『広

韻』をそのままに古音に組み入れようとする無謀さへの批判が含まれており、これは、王国維が阮元を「全く無知である（全属慣）」とした見解と重なる⁽³⁶⁾とある。しかも方東樹は「今の用に施さんと欲するに非ず」とあるように阮元の意図を正確に見抜いた上で曾釗に忠告しており、他の多くの人々も概ねこのような見解であつたと考えられる。

阮元の依頼に対し曾釗は有名な道光十五年の阮元宛書簡「阮雲台相國に上る書」において次のように言っている。

秋仲、李孝廉能定京師より還り、江君の韻書・王氏の二十一部韻表を頒發し、并せて二十一部韻稿本を擲回するに奉到す。訓誨諄諄、感佩に勝へず。⁽³⁷⁾

これを見ると曾釗はこの時点で稿本を作成していることがわかる。ここにある「王氏の二十一部表」については、濱口氏はこれを王念孫の「二十一部韻表」とし⁽³⁸⁾、陳鴻森氏は既に刊行されていた王梓材の「二十一部韻表」としている。⁽³⁹⁾がどちらであるかは判断としない。陳鴻森氏の指摘する所によれば、年代は不明であるが「段氏十七部古音序」の後の識語において二十一部が完成しないのであれば、十七部でも十分であると考えていたようである。⁽⁴⁰⁾結局この一連の事業は阮元の熱意にもかかわらず、完成することはなかつた。陳鴻森氏はその熱意の減退の原因を阮元の老

齢によるものとしている。⁽⁴¹⁾しかし、ことの成否はともかく、これにより結果として後世阮元は古韻に関して全く無知である、という評価を受けることになってしまうのである。

おわりに

以上所謂粵東刊改の顛末を概観してみたが、前述した道光十年の「与学海堂呉学博蘭修書」において「今韻を以て今の詩文を爲るは則ち可なり。若し古詩賦を作りて今韻を用いるは、今ならず古ならず。識者之を哂はん」とあり、また「段氏十七部古音序」にもほぼ同様の文言があることから考えると、王国維の言う如く阮元は古韻学に全く無知であったとは考えにくい。むしろ古韻学に対してある概ね理解していたと考えるべきではないだろうか。それは「武進張氏諧声譜序」における阮元の発言が、道光十三年以降道光十七年までの期間に「古韻二十一部」の理解を深めたとするより、むしろ阮元の従来よりの古韻における理解の程度を示唆するものと考えるのが自然ではないだろうか。つまり阮元は古韻学を理解しながらも、敢えて粵東刊改の挙に及んだ。そこには純粹なる古韻学とは別に、阮元の『文選』に依拠する文学者としての思想的立場がそうさせたと考えられる。駢体文の文章家である阮元の文章論である「文言論」・「文韻論」をみると、その立場がより明瞭に看取される。贅言するまでもないが当時の文学研究

は文学鑑賞だけに止まらず、文章製作者としての力量が要求されるのは当然である。要するに阮元は「文韻論」に述べる「豈に漢・魏以来の音韻は、其の本源を溯れば、亦経より出づるを知らんや」という認識の本に、「与学海堂呉学博蘭修書」に「漢以上の文章辞賦を擬する者に於いて取りて之を用うに便ならしめんと欲す」また「若し晋・漢の文辞を学びて、更に能く漢・晋以上の韻を謹守し、法を上に取り、乱韻を撥め、之を正しきに反せば、更に善からずや」と述べる如く、古韻学を応用してより古形の有韻の文章製作を目指したことが理解できる。従つて粵東刊改の問題は阮元の古韻に対する無知によるものではなく、阮元の文学的視座により生じた問題だと考えられる。

注

- (1) 陳鴻森 「阮元刊刻《古韻廿一部》」 相関故實辨正—兼論《經義述聞》作者疑案』、『中央研究院歷史語言研究所集刊』第七十六 第三分所収 二〇〇五年 四四七頁 「然則王・阮二氏、終王念孫之世、竟不知其古韻分部道光元年已改分二十二部」とあり、阮元・王引之は最晩年に王念孫が、古韻二十一部から二十二部に改めたのを知らなかつたらしい。

- (2) 羅振玉 『羅雪堂先生全集』五編(十三) 台湾 大通書局有

限公司 一九七六年 五五六一頁・五五七三〜五五七四頁

(3) 陳鴻森 「阮元與王引之書九通考釋」 『中國典籍與文化論叢』
第八輯所収 二〇〇五年 二四九頁・二六〇頁

(4) 陳鴻森 前掲論文 二四九頁 「古韻廿一部刻字之事、若元在粵、十日即成、而至今杳然。吳蘭修辨事有名疲緩、亦不催之矣。堂中經解、若非夏道與厚民緊緊催辦、必致中輟(夏升去、即無人可出力、巧巧刻完即升)。因年兄大人此時居鄉無事、何不將廣韻取出、送一教館之人令其排寫(字要似廣韻大字之大)、特須至・祭等一一指示耳。單寫大字、不寫小字、不過數萬字、寫成、交舍下刻之甚易、舍下管事者張茂才(鶴書、號琴堂)舍親、付之即可刻也」

(5) 王念孫等撰 『高郵王氏遺書』 江蘇古籍出版 二〇〇〇年
五四頁

(6) 王韋濤 『阮元年譜』 黄山書社 二〇〇三年 八二九頁

(7) 濱口富士雄 『清朝考拋学の思想史的研究』 国書刊行会 一
九九四年 五五五頁 陳鴻森 前掲論文 二五一頁

(8) 陳鴻森 前掲論文 二六〇頁 「冬半接京中來書、知墓銘已收到、冬間想已到家鄉矣。頃接粵中曾劍書、知廿一部古韻已上板、冬初前有等語、然則前書欲在揚另刻者不必矣。曾公書內又云如風・芄等字亦須提出、究不知其所提者若干字也」

(9) 陳鴻森 「阮元刊刻《古韻廿一部》相關古實辨正一兼論《經義述聞》作者疑案」 一三六頁

(10) 王国維 『觀堂集林』 卷第八 中華書局 一九九九年 四〇四〜四〇五頁 「先生諸韻譜中、最切要者為說文諧聲譜。先生恒舉以示人、致李許齋方伯書中、所錄至・祭二部及侯部入聲表、即自此譜中摘出者也。後以定稿寄阮文達公於廣東。故遺書中僅有初稿、雖二十一部完具、然所錄許書字不過二十分之一而已。此書文達在粵東時擬為刊行、未幾去粵、而稿本尚留學海堂。文達於嘉慶乙丑由雲南致文簡云(中略)此書粵中刻成與否、雖不可知、即令刻成。乃任不知此事之人、將表中諸字任意出入、不如不刻之為愈。可知文達於此事全屬憤憤。不知文簡得此書如何作答也。又第一札斬勸文簡將廣韻取出、令一教館之人排寫、此事亦談何容易、然因此可知先生此譜、家中別無副本矣。先生父子歿後、遺稿在第三孫忠介(壽同)所。道光季年、鄞縣王履軒(梓材)館忠介家、為補二十一表、冠詩經因譜之首。履軒治史學、與徐星伯・張石舟諸公遊。又

補宋元學案、有名於時、然於此學實未能升先生之堂、其於至
・祭二部及侯部入聲、均不用先生原譜。又不用原譜體例。蓋
未知先生此譜為說文而作、其書視令教館之人照廣韻排寫者未
之能愈也。嗚呼、以文達之通博、而於先生之學尚隔膜如此」

(11) 蕭璋 「王右隴刪訂爾雅義疏聲音韻謬誤述補」 『浙江學報』

第二卷 第一期所収 一九八四年 十七頁〜十八頁 孫玄常

「王念孫爾雅義疏郝注(疏) 刊誤札記」 『語言文字研究專輯』

(下) 所収 上海古籍出版 一九八七年 三七二頁

(12) 濱口富士雄 前掲書 五五九頁

(13) 濱口富士雄 前掲書 五六〇頁

(14) 阮元 『鞏經室集』(下) 世界書局 一九八二年 四二頁

「其現曰、今之讀二百六部者、(少矣。求之于古、既不合。以
示于今則未曉、而徒) 不牽引之、分割之、甚無謂也。今故舉
而空之、以詩求韻、佐以易・屈。以韻別部、以部類聲、以聲
譜說文字而已。張氏此說奇而法、審說文之聲亦細、以見未有
韻書時本來部居。」() 内は阮元が省略した部分であるが、よ
り文意を明瞭にするため『說文諧声譜』の原文を以て補った。

(15) 張成孫 『說文諧声譜』 『統經解四書類彙編』(二) 所収 芸

文印書館 一九八六年 九八〇頁 「諸家皆以廣韻標目、其

不合者、割裂分之、是取其虛目也」

(16) 濱口富士雄 前掲書 五六〇頁

(17) 阮元 前掲書(下) 九三頁 「乾隆丙午、入京謁先生、先生

之學、精微廣博、語元、元略能知其意、先生遂樂以為教。元
之稍知聲音・文字・訓詁者、得於先生也。(中略) 古音自顧
氏・江氏・戴氏皆有考正、金壇段氏分十七部為益精、段氏之
分支・之・脂為三部也。發前人所未發、先生昔亦同見及此、
因段書先出、遂輟作。然先生所分者、乃二十一部、東一・蒸
二・侵三・談四・陽五・耕六・眞七・諄八・元九・歌十・支
十一・至十二・脂十三・祭十四・盍十五・緝十六・之十七・
魚十八・侯十九・幽二十・宵二十一、案之羣經・楚辭、斬然
不紊、其分至・祭・盍・緝為四部也、則更顧・段諸家之所未
及、陸法言所未析者」

(18) 阮元 前掲書(中) 六一七頁 「元幼為文選學、而壯未能精

熟其理。然訛文脫字、時時校及之、昔但得元張伯顏明晉府諸
本、即以爲祕冊、嘉慶丁卯、始從昭文吳氏易得南宋尤延之本、
爲無上古冊矣。(中略) 元家居揚州舊城文選巷、即隋曹憲故

里、李崇賢所由傳文選學而爲選注者也。元既構文選樓于家廟旁、繼得此冊、藏之樓中」

- (19) 阮元 前掲書(中) 三六四頁、三六五頁 「元謂古人古文小學與詞賦同源共流、漢之相如・子雲、無不深通古文雅訓、至隋時曹憲在江淮間、其道大明、馬・揚之學、傳於文選。故曹憲既精雅訓、又精選學、傳於一群、公孫羅等、皆有選注、至李善集其成。然則曹・魏・公孫之注、半存李善注中矣。(中略) 唐人屬文、尚精選學、五代後乃廢棄之。昭明選例、以沈思翰藻爲主、經・子・史三者、皆所不選、唐・宋古文、以經・史・子三者爲本。然則韓昌黎諸人之所取、乃昭明之所不選、其例已明著于文選序者也。桂苑珠叢久亡佚、間見于他書、其書諒有部居、爲小學訓詁之淵海。故隋・唐間人注書引據、便而博。元幼卽爲文選學、既而爲經籍纂詁二百十二卷、猶此志也。此元囊日之所考也」

- (20) 近藤光男 『清朝考証学の研究』 研文出版 一九八七年 四一七頁

- (21) 李貴生 「阮元文論的經学義蘊」 『漢学研究』 第二十四卷第一期所収 二〇〇六年 三一二頁

- (22) 阮元 前掲書(中) 五〇五頁 「聖賢之道存于經、經非詁不明、漢人之詁、去聖賢爲尤近、譬之越人之語言、吳人能辨之、楚人則否。高曾之容體、祖父及見之、雲仍則否。蓋遠者見聞、終不若近者之實也。元少爲學、自宋人始、由宋而求唐、求晉・魏、求漢、乃愈得其實、嘗病古人詁散而難稽也。于督學浙江時、聚諸生于西湖孤山之麓、成經籍纂詁百有八卷(中略) 漢之相如・子雲、文雄百代者、亦由凡將・方言、貫通經詁、然則舍經而文、其文無質、舍詁求經、其經不實、爲文者尚不可以昧經詁、況聖賢之道乎」

- (23) 李貴生 前掲論文 三一二頁

- (24) 王念孫等撰 前掲書 一九八頁、二〇〇頁 「曩者戴東原庶常・朱笥河學士、皆欲纂集傳注、以示學者、未及成編、吾師雲臺先生、欲與孫淵如編修、朱少河孝廉共成之、亦未果。及先生督學浙江、乃手定體例、遂韻增收、總彙名流、分書類輯、凡歷二年之久。編成一百十六卷、展一韻而衆字畢備、檢一字而諸訓皆存。尋一訓而原書可識。所謂握六藝之鈐鍵。(中略) 後覽是書者、去鑿空妄談之病、而稽于古、取古人之傳注、而得其聲音之理、以知其所以然而傳注之未安者、又能博考前訓以正之、庶可傳古聖賢著書本旨、且不失吾師纂是書之意與」

(25) 梁啓超『中國近三百年學術史』『飲冰室合集』(十)所收
中華書局 一九九六年 二〇八頁

(26) 阮元 前揭書(中) 五六七頁 「古人以簡策傳事者少、以口舌傳事者多、以目治事者少、以口耳治事者多。故同爲一言、轉相告語、必有愆誤。是必寡其詞、協其音、以文其言、使人易於記誦、無能增改、且無方言俗語雜於其間、始能達意、始能行遠、此孔子於易所以著文言之編也。古人歌詩·箴銘·諺語、凡有韻之文、皆此道也。爾雅釋訓主於訓蒙、子子孫孫以下、用韻者三十二條、亦此道也。孔子於乾坤之言、自名曰文、此千古文章之祖也。爲文章者、不務協音以成韻、修詞以達遠、使人易誦易記、而惟以單行之語、縱橫恣肆、動輒千言萬字、不知此乃古人所謂直言之言、論難之語、非言之有文者也。非孔子之所謂文也。文言數百字、幾於句句用韻。(中略)然則千古之文、莫大於孔子之言易。孔子以用韻比偶之法、錯綜其言、而名曰文、何後人之必欲反孔子之道、而自命曰文、且尊之曰古也」

(27) 阮元 前揭書(下) 一一九頁 「福問曰、文心雕龍云、今之常言、有文有筆、以爲無韻者筆也、有韻者文也。據此、則梁時恒言有韻者、乃可謂之文、而昭明文選所選之文、不押韻脚

者甚多、何也。曰梁時恒言所謂韻者、固指押脚韻、亦兼謂章句中之音韻、即古人所言之宮羽、今人所言之平仄也。福曰、唐人四六之平仄、似非所謂於梁以前。曰、此不然八代不押韻之文、其中奇偶相昇生、頓挫抑揚、詠歎聲情、皆有合乎音韻宮羽者、詩·騷而後、莫不皆然。(中略)是以聲韻流變而成四六、亦祇論章句之平仄、不復有押脚韻也。四六乃有韻文之極致、不得謂之爲無韻之文也。昭明所選不押韻脚之文、本皆奇偶相生、有聲音者、所謂韻也。休文所矜爲剽獲者、謂漢·魏之音韻、乃暗合於無心、休文之音韻、乃多出於意匠也。豈知漢·魏以來之音韻、溯其本原、亦久出於經哉。孔子自名其言易曰文、此千古文章之祖。文言固有韻矣、而亦有平仄聲音焉。(中略)綜而論之、凡文章在聲爲宮商、在色爲翰藻。即孔子文言雲龍風虎一節、乃千古宮商翰藻奇偶之祖、非一朝一夕之故一節、乃千古嗟歎成文之祖、子夏詩序情文聲音一節、乃千古聲韻性情排偶之祖。吾故曰、韻者即聲音也、聲音即文也。然則今人所便單行之文、極其奧折奔放者、乃古之筆、非古之文也。沈約之說、或可橫指爲八代之衰體、孔子·子夏之文體、豈亦衰乎。是故唐人四六之音韻、雖愚者能效之、上溯齊·梁中材已有所限、若漢·魏以上、至於孔·卜、此非上哲不能擬也」

(28) 近藤光男 前揭書 四二二頁

(29) 阮元 前掲書(下) 一三三頁 「自陸灋言等定四聲韻爲二百六韻之後、唐人作詩賦、并窄爲寬、沿至今、祇一百六韻矣。以今韻爲今詩文則可、若作古賦詩辭而用今韻、不今不古、識者哂之。至於唐・宋以來、獨用通用、淺人所爲、已鮮依據。或且臆以時俗土音、動輒亂用、直似以元人劇曲之韻。擬唐人爲律賦、更不如今一百六韻矣。豈有不明音韻篆文訓詁、能上擬相如・子雲者哉(即如昌黎進學解韻、臆用無法、世罕知其謬者) 然則將奈何、因思古韻之分合、近惟金壇段氏若庸六書音均表十七部爲善。如之・脂・支・哈四韻、唐人皆并爲四支合用。孰知羣經・楚辭皆斷分三部、絕不相混、文選亦分不通用乎。高郵王懷祖先生、精研六書音韻、欲著古音一書、因段氏成書、遂即輟筆。(余三十年前即聞此論) 然其廿一部、甄極詩・騷、剖析豪芒、不但密于段氏、更密于陸氏者、予屢欲廣韻而以古音分部、使便於擬漢以上文章辭賦者、取用之、迄未暇爲之計。學海堂中年兄、深鑒古音、曷就段氏精審之、而進以王氏之學、定爲古韻廿一部、以羣經・楚辭爲之根柢、爲之圍範、庶無隔部臆用之謬乎。或曰漢・晉文章之韻已有出此圍範者、奈何以此限之、答曰、漢・晉文章、齊・梁之韻難寬、而之・支・脂等韻、未曾通雜、若學漢・晉文辭而更能謹守此漢・晉以上之韻、取法乎上、撥亂韻而反之正、不更善乎。況以今韻一百六韻、而并爲廿一部、已寬之至矣。學者亦何憚而

不用此韻哉。年兄試再與堂中林・曾・楊子商榷寫定。(即如廿一部至・質、須在各韻中將各字提摘而出、錯刪去彼韻之字) 即可在堂中桀板成帙。不過數萬大字、即可嘉惠學古之士、予雖老、亦樂得觀之、且可以分授家鄉子弟矣。庚寅閏月」

(30) 陳鴻森 「阮元羣經室遺文輯存」 『清代揚州學州』所收 中央研究院中國文哲研究所 二〇〇五年 六七二頁

(31) 陳鴻森 前掲書 六七二頁

(32) 陳鴻森 「阮元與王引之書九通考釋」 二六二頁

(33) 李貴生 前掲論文 三二四頁

(34) 阮元 前掲書(上) 一頁 「余三十餘年以來、說經記事、不能不筆之于書、求其如文選序所謂事出沈思、義歸翰藻者、甚鮮。是不得稱之爲文也。今余年屆六十矣。自取舊帙、授兒子輩重編寫之、分爲四集。其一則說經之作、擬于賈・邢義疏已云僭矣。十四卷。其二則近于史之作、八卷。其三則近于之子作、五卷。凡出于四庫書史・子兩途者、皆屬之、言之無文、惟紀其事、達其意而已。其四、則御試之賦、及駢體有韻之作、或有近于古人所謂文者乎。然其格已卑矣。凡一卷」

- (35) 方東樹『考槃文集文錄』『儒藏』精華編二七五所収 新華書店 二〇一一年 一四四頁 「儀徵阮相國深韙其說、因屬吾友南海曾君勉士依其類例作《二十一部古韻》。余聞而疑之、私諗於吾友曰、凡所以求古音者、將以證古經音、而非欲以施今用也。苟經音既得則止、非必尊古而卑今、以矜爲苟雖也」
- (36) 濱口富士雄 前掲書 五七八頁
- (37) 曾釗『面城樓集鈔』卷四『海學堂叢刻』所収 光緒年間刊 七〇八葉 「秋仲、李孝廉能定、自京師還、奉到頒發江君韻書、王氏二十部韻表、并擲回二十一部韻稿本、訓誨諄諄、不勝感佩」
- (38) 濱口富士雄 前掲書 五七五頁
- (39) 陳鴻森 「阮元刊刻《古韻廿一部》」相關故實辨正—兼論《經義述聞》作者疑案 四三七頁
- (40) 陳鴻森 「阮元寧經室遺文輯存」 六七二頁
- (41) 陳鴻森 「阮元刊刻《古韻廿一部》」相關故實辨正—兼論《經

義述聞》作者疑案 四三七頁

**About Ruan Yuan Publication
Problem in Etsutoukankai**

Shinji WAKAMATSU

Division of General Education

Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi,
807-8586, Japan

No English abstract